

◇===== [ 第 29 号 ] =====◇

唯契の窓 唯物論的社会契約論研究所月報

2020 年 9 月 1 日

◇=====◇

今日は「防災の日」です。1923 年 9 月 1 日 11 時 58 分ごろ、関東地震が発生しました。南関東を震源とした M8 前後の巨大地震でした(最大震度は6)。この地震によって引き起こされたのが関東大震災です。関東地震は相模トラフに沿った断層のズレによって発生したと考えられており、1703 年にも同じメカニズムで巨大地震が発生していたことが知られています。この時の地震は元禄大地震と呼称されています。

今また日本列島は地質学的な活動期に入ったと言われております。いつ起きても不思議ではない巨大地震。改めて地震への備えは、国が責任をもって行うべきだと強調しておきたいと思えます。特に、現在進行中の CoVID-19 感染症のパンデミックへの対策とも共通する課題として、医療供給体制の充実と併せ、大都市周辺地域への病院の分散化なども検討していくべきではないかと考えています。

●===== [ 時事批評 ] =====●

コロナ禍のただ中ではありますが、今月は今回のパンデミックが終了した後の政治の世界に目を向けてみたいと思えます。

コロナウィスルのパンデミックが始まる以前から、各国の政治には構造的な危機が進行していました。フランスやドイツなど EU 各国での極右勢力の台頭や、アメリカでの宗派政治のはじまりなどです。アメリカの場合トランプ大統領が「アメリカファースト」を唱えて大統領選挙に勝利しましたが、彼の場合その支持基盤はキリスト教福音派にあって、宗派政治と呼ぶ方が正しいのではないかと思います。そして日本においても維新の会という右翼的会派の台頭が関西地方を皮切りに各地に波及し始めています。維新の会を右翼的会派と位置付ける事には異論があるかもしれませんが。しかしその政治手法(政治目的を達するための手段)は、民主主義的な討論と合意の形成を尊重するものではなく、強力なリーダーを制度的に作り出すことによってなそうとしている点で右翼的会派に位置付けることは、合理的な評価と言えるでしょう。

世界各地で台頭する自国中心主義あるいは民族主義的な(したがって排他的な)政治勢力が国政を握った結果、どのような事態が起こるのか。これについては 1930 年代に人類は経験済みです。イタリアにおいてはファシスト党、ドイツにおいてはナチス、スペインにおいてはフランコ率いるファランヘ党による独裁体制が確立し、労働運動や左派勢力を弾圧しました。

イタリア・ドイツに日本を加えた三国が同盟を結び、他の植民地保有諸国の

連合と対立し、その結果生じた植民地争奪戦争こそが第二次世界大戦だったわけです。今日においては第二次世界大戦は独裁国家と民主主義国家との戦いという性格付けがされることが多いのは、日独伊三国の内政や外政があまりにも国民の自由を抑圧するものであったため、それらの国の政治指導者を一掃する結果となったことが民主主義の勝利のように評価されたことと、植民地が戦争前や戦時中に独立運動を強化し、植民地の再分割という結果にならなかったことで、植民地争奪戦争という側面が影をひそめたということもあると思われます。

そう、独裁や多民族抑圧の政治勢力は第二次世界大戦の結果、一掃されたはずでした。ではなぜ今日またネオナチなどの極右勢力が人々の支持を集めるようになったのでしょうか。その要因として、1930年代の頃との経済状況の類似性をあげる論調もあります。

1930年代のドイツは、第一次大戦の戦後処理に際してベルサイユ条約により莫大な賠償金を請求されており、経済的には非常に苦しい状態にありました。ハイパーインフレーションも発生して、当然国民の生活は苦しく、国際的にも強い国家を求める世論と、ユダヤ人への反感を取り込んでナチスは政権を獲得したわけです。この当時と現在の世界の状況を比較して、財政規律を重んじるEUの下での緊縮財政が国民生活を圧迫していること、移民・難民の流入が自国民の職業を奪っているという言説で彼らへの反感・あるいは民族差別の増幅などが、当時と似通っているからではないかというものです。

中央大学の星野智氏は、ヨーロッパの極右政党について、「その背後にある基本的な政策はゼノフォビアであり、レイシズムの変種としての文化主義であり、既存システムの改革要求である」と位置付け、その政治的主張に対する国民の支持を取り付ける手法として「カリスマ的な指導力に加えて、民衆を突き動かす時代的な「ムード」が必要であり」、「それが醸成されるのは、移民・難民の急増であり、テロ行為の頻発であり、そして経済的な困難である」と指摘しておられます<sup>1</sup>。

また同じく中央大学の古賀光生氏は、極右政党が「党として一体的なイデオロギーや新たなアイデンティティを支持獲得の基盤としているのではなく、資源配分という政治の最も古い争点をめぐって従来への憤りに異議を申し立てている点である。」<sup>2</sup>と指摘されています。

---

<sup>1</sup> 星野智「西欧諸国の極右ポピュリズム政党の台頭とその背景」中央大学社会科学研究所年報第21号（2016）

<sup>2</sup> 古賀光生「現代ヨーロッパにおける、いわゆる「極右」政党の台頭の分析」

このように、極右勢力の台頭には現在の政府について、とりわけ国民生活の疲弊と外国人労働者（移民・難民も含む）に対する反感が背後にあると考えられます。コロナウイルスのパンデミックが、さらに各国の経済を疲弊させることは目に見えていますから、パンデミック終息後には各国政府への不満が高まる可能性もあります。

では、歴史の過ちを繰り返さないために、いま私たちがすべき事は何なのでしょう。あるいは何ができるのでしょうか。一つ重要な視座があります。

エーリッヒ・フロムは『自由からの逃走』の中で、近代以降の個人の心理について次のような指摘を行っています。

「すなわち自己を自然や他人とはちがったものとして意識することによって、またたとえぼんやりとはしていても、死や病気や老衰を意識することによって、人間は宇宙や「自分」以外のすべてのものと比較して、自分がどんなに無意味で卑小であるかを感じないわけにはいなくなる。どこかに帰属しないかぎり、また生活に何らかの意味と方向とがないかぎり、人間はみずからを一片の塵のように感じ、かれの個人的な無意味さにおしつぶされてしまうであろう。」<sup>3</sup>

こうした帰属への要求が、ナチスへの支持を生んだわけですが。しかしフロムはこうした不安が直接ナチズムへの支持に結びつくわけではないこともまた示唆しています。

「個人に安定感をあたえていた第一次的な絆がひとたび断ちきれぬやいなや、そして個人がかれのそとに完全に分離した全体としての世界と直面するやいなや、無力感と孤独感とのたえがたい状態にうちかつために、二つの道がひらかれる。一つの道によって、かれは「積極的自由」へと進むことができる。かれは愛情と仕事において、かれの感情的・感覚的および知的な能力の純粋な表現において、自発的にかれ自身を世界と結びつけることができる。こうしてかれは、独立と個人的自我の統一とをすてることなしに、再び人間と自然とかれ自身と、一つになることができる。かれのためにひらかれているもう一つの道は、かれを後退させ、自由をすてさせる。そして個人的自我と世界とのあいだに生じた分裂を消滅させることによって、かれの孤独感にうちかとうと努力する。この第二の道は、かれを世界と再び結びつけるとしても、個人として解放されるまえに、かれが世界と関係していたようなぐあいにはけっしていかない。なぜなら分離しているという事実を動かすことはできないからである。」<sup>4</sup>

この第二の道が、ナチズムへの帰属を促したのもですし、もしかすると今後新興極右勢力あるいは極右ポピュリズムへの帰属意識を促進するかもしれない

---

<sup>3</sup> エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』28頁

<sup>4</sup> 同書。159頁

ものです。

しかしこうした不安は、実は今日の資本主義的な経済の仕組みの中でもたらされていることを見逃してはなりません。フロムは述べます。

「商品と同じように、これらの人間の性質の価値をきめるものは、いや、まさに人間存在そのものをきめるものは、市場である。もしある人間の持っている性質が役に立たなければその人間は無価値である。ちょうど売れない商品が、たとえ使用価値はあっても、なんの価値もないのと同じである。このようにして自信とか「自我の感情」とかは、たんに他人の自分に対する考えをさしているのにすぎない。それは市場における人気や成功とは無関係に、自己の価値を確信している自我ではない。もし他人から求められる人間であれば、その人間はひとかどのものであり、もし人気が無ければ、かれは無に等しい。自己評価が「人格」の成功に依存しているということが、近代人にとって人気を恐るべき重要さをもってくる理由である。」<sup>5</sup>

つまり労働力を商品として売り買いする労働市場の存在こそが、自己の存在に対する不安の根源なのです。ですから、旧来の社会契約説によるのではなく、それぞれの個人が社会の要請に応じて分業体制の中で自らの役割を果たすことで他の人々とつながっていることを実感できる、唯物論的社会契約論に基づく経済の仕組みづくりを進めていけば、こうした不安を生むことは二度とありません。

手前味噌のようですが、社会の絆を本当に確たるものにすること。それこそが前世紀の悪夢を繰り返さない最大の保障であり、そのための理念こそが唯物論的社会契約論であるということを改めてお伝えしておきたいと思います。

今回は表現が難解になってしまったかもしれません。未熟さを痛感しております。

●=====●

★===== [コラム] =====★

安倍総理が辞任の意向を固めたと報じられました。

あれやこれやと理由をつけてはいますが、要するに「また放り出した」ということでしかありません。無能な人間がトップを務めると、国政はここまで荒廃するのかと、後世の歴史家はさぞあきれ果てる事だろうと思います。しかし安倍総理の尻拭いをさせられるわれわれ現役世代の国民はたまったものではありません。とりわけ、自分の趣味でさんざん膨れ上がらせた防衛装備品の支払

---

<sup>5</sup> 前掲書。136-137 頁

いはどうしてくれるのか、こじらせるだけこじらせたお隣韓国との関係修復はどうしてくれるのか、もっと直截に言えばアベノマスクの支払いはどうしてくれるんだというようなことでもあります。まあ、安倍ごときが「敵勢力のボスキャラ」というわけではありません。あんなへなちょこ総理がボスキャラならかえって楽というものですが、かれは財界の使い走りにすぎません。敵の本丸は財界というわけです。彼らが後継者に何を求めるのか、あるいはさせるのか。これからも目を光らせておく必要があるでしょう。

ところで昨日は恒例の「唯契の窓 2020年夏号外」を駅頭配布してみました。今回は学生さんを中心に70部受け取ってもらえました。テーマ（「パンデミック下の経済政策と資本主義の限界」）が良かったのか、8頁建てという見てくれが良かったのか、去年の三倍以上の受け取りでした。バスを待つ間に意見を聞かせてくださる中年男性もおられまして、なにがしかの反響があればと楽しみです。

★=====★  
次回の発行は10月1日を予定しております。